

という側面が抜け落ちることになる。しかし、第6巻の画家＝哲学者が「神的なモデル」に目をやりながら制作するように、第9巻でも「天空に掲げられたポリス」（アイデアではないが理想的）を見ながら制作を行うことが含意されているとすると、その制作物は「魂＝自己」と「ポリス」の両者であろう。第9巻では「自己自身をポリスとして形づくる」ことが語られていたが（590e3-591a1, cf. 591e1, 592a1-4）、他方で、地上にその似像としてのポリスを建設することで「自己をそこに住まわせる」のであれば、哲人統治の理想を十分に言い表していることになる。すると、問題の表現 (D) は「天空のモデルを見て、それに倣って建設する地上の理想ポリスに、自己を住まわせる」という意味に理解できる。そこで政治を行うポリスこそ、(B) 「自身のポリス＝自身に相応しい理想のポリス」に他ならない。

(E-G: 592b2-5)

(D) の箇所「地上の理想ポリス」という要素を読み込んで理解することは、一見困難に思われるかもしれない。しかし、(E) の主語「それ」と、それを受けている (F) の「このポリス」は、明らかに地上のポリスを指している。「それがどこかにあるか、将来実現するかは、重要ではない」という文の主語は、天空のものではないからである（天空のポリスは常にある）。(E) の文の主語は前文から補われるべきであるが、「ἐαυτὸν κατοικίσειν」を (I) と (II) のどちらに解釈してもこの主語は補えない。「理性ある人」がそこで政治を行うのが、(II) の場合は「自身の内なるポリス」、即ち「魂」であることになり、また (I) の場合、「天上のポリス」になる。だが、どちらもまったく意味をなさない。この文の主語は明らかに地上の理想ポリスであり、天上にモデルがある限りそれがいつでも実現可能であるという意味で、「それがどこかにあるか、将来実現するかは、重要ではない」と語られているのである。

(F) についても、魂の内や天上で「ポリスのことを実践する」ことはできず、また、グラウコンが言っていた「言論において設置してきたポリス」(a9-10) で政治をすることも、比喩以外の意味を持たない^{*26}。他方で、天空のモデルである「ポリス＝天体」を見ながら地上に正しいポリスを実現させる、という意味が読み込めるとすると、そのような理想的なポリスにおいて政治を行うという主張は理解可能であり、ソクラテスのこれまでの立場に相応しい。

(F) 「このポリスのことだけを実践するのであり、他のどのポリスのことでもないのだから

^{*26} もしアナクサゴラス逸話が考えられているとすると（注 12 参照）、「政治的实践」とは天文学等の観照的学問を意味することになるが、やはり「政治」は比喩に過ぎなくなる。

ら」というソクラテスの発言を文字通りにとると、哲学者は理想的な政治活動を行うために、逆に、その活動の場としての理想国家の建設に努力する、という含意が読み取れる。それこそが、ソクラテスの「哲人統治」の提案に適う解釈となる。

グラウコンがこれに対して、(G)「おそらく」(εἰκός γε, 592b5) と返事をした時、彼はソクラテスの真意を最終的に理解して受け入れたのであろうか？

このようにグラウコンとソクラテスのやりとりを追うと、2人の基本的なスタンスの違いが議論のズレを生んでおり、ソクラテスはグラウコンの意見を正すことで、理性的な人間である哲学者が政治を実現していく、という基本主張を確保していることが分かる。このズレを理解しない現代の解釈者たちは、グラウコンと同様に、理想国家論をメタファーとして、「非政治化」して捉えてしまったのである^{*27}。

(慶應義塾大学)

^{*27} 本論文は著者が代表を務める科研費プロジェクト検討会、及び、2010年10月16日に京都大学で開催されたフィロロギカ研究会で発表した内容に手を加えたものである。その折にコメントいただいた多くの方々、並びに、本誌査読者に感謝申し上げたい。なお不十分な点の責任は著者にある。